

私的・鳥学の日本土着化論

福田道雄

私が、鳥を調べ始めてから（種名を調べたり、羽数を数えたりするようなこと）、約18年目となった。一応、いきもの関係の専攻をしたが、最初は、鳥のことは全く何も知らず、興味もなかった。まず、識別用の本を買ひ、また鳥の本を読んだ。何年かそんなことをして、本などに書かれていることをヒントにして、少しは、どう調べればいいのかはわかってきた。

そして、計画的に記録をとり始めた。そして、次にやったことは、入手出来たいろいろな報告文を読んで、どのようにまとめるかを考えてみた。まさに物まねから始めた。出来るだけ似たようなことをした調査を捜し出し、それと同じようにまとめてみたわけである。

しかし、いろいろなことをやってみるうちに、次第に似たようなことをして、報告したものが見つからなくなってきた。そのため、一種の挫折に陥った時期が続いた。今から考えると、それは、いわゆるプロと呼ばれる人達はその種のことをやらないためであることがわかった。

私は、時々話題になるプロとアマの違いについては、基本的に区別の無いものだと思っている。おそらく、プロとされる人達は研究する時間が沢山あり、それに関する資料を調べる時間と条件が整っていて、そのようなことを効率よく行う訓練をより多く受けていて、さらにそれらを絶え間なく実行するのにある程度向いた性格をしているのだろう。反対に、アマはそれらのいくつかはほとんど整ってない状況にある人達ではないだろうか。

話がそれだが、プロ化していくとプロの間では、もうまとめてみたり、報告するのに値しないことがどんどん出てくるようだ。そんなことより、人がまだ手を付けてないことを少しでも多くやった方がいいし、また、そうしなければ評価されないわけだろう。しかし、鳥学会を構成する大多数のアマは、何をどうまとめればいいのか、手本にするものが非常に少ないのではないだろうか。

いわゆるアマの人達の集まりに出ていて、酒を飲みながら（それだけに本音だと思う）、報告を投稿してみたが、手直しされ自分の書いたもので無くなってしまったので、出すのをやめてしまったという話を何度となく聞いた。これはその人自体の問題もあるが（ここは強く言いたいが、報告は、よりうまい人におしてもらいながら、まねてうまくするのが、一番得な方法だ）、最初に出す時に手本にするものがあまりないことによる弊害も非常に大きいと思う。



少しはあっても、なかなかすぐ見れるほど、多くのところにはない。また、内容もやさしくない。具体的でない。特に、いろいろなものがない。

そこで、すでにお手本を出せる人に強く希望したい。簡単な事例報告から、いろいろな物まねの出来る(場所、種名、数値だけを入れ換えればことたりるくらいなものも、もっといっぱい書いて出して欲しい。いやむしろ、鳥学会に物足りなさを感じたり、学会は、あんなのでは駄目だと思っている人は、率先して書くべきである(この辺で、相当な反論をいただきそうであるが)。

幸いなことに日本には、一応の鳥専門の報文誌が多数ある(程度もさまざまに揃って)。さらに幸いなことにどこでも、慢性的な原稿不足となっている。市販の雑誌や何かの団体の機関誌などに面白く、うまく書けた話が載っても、報告文を書くのにはなかなか役には立たない。鳥を調べても、報告を書く人が増えなければ、「鳥学の土着」は進まないと考える。当初は、そんなことに余力を削ることが、プロの飛躍の妨げになる恐れもあるが(どうせ、そう沢山の人が、私の考えに同意をしてくれることはないと思っているが)、長い先、大きな底辺を造り始めるきっかけとなるはずだと思う。そしてそれは必ず、プロへも返っていくはずである。

私自身、物まねからしか始められなく、鳥を調べるのに、とにかくあらゆるお手本が欲しいのである。推論の組み立て方、統計処理の方法、うまいサマリーの書き方などなど。はっきり言って、うまく書ける人は前記のような点で、さぼっているのではないかと強い不満を持っている。そして多くの人も、身近でわかりやすいお手本不足で、挫折せざるを得ないと感じていると考えている(少なくとも、私個人はそういうはっきりした感触を持っている)。機会に恵まれた人は、寛大な精神をもっと発揮して、鳥学会の底上げに貢献すべきである。私の知る限り、手本があれば書いてみたい人は結構沢山いる。私もそうだ。

最後になったが、編集者から藤岡、呉地両氏に続き、本当に言いたいことを言って欲しいとの意向を受け、両氏とは少し異なる(かなり自伝的な)立場から、書かせていただいた。少しでも賛同して、動いてくれる人が出てくることを強く願う。

関連学術集会 (1992)

◆3月19~22日 B O U大会 (St. Aidans College, Durham Univ.)

今年のB O U (イギリス鳥学会) 年次大会はダラム大学で開催されます。今年のテーマは「Territory site fidelity and natal philopatry in birds: comparisons between and within species」です。プログラム等、詳細はIbis誌の新年号に載ります。

◆4月1~4日 日本生態学会第39回大会 (名古屋大学農学部)

4月1日から4日にかけて、日本生態学会が名古屋大学農学部で開催されます。毎年、鳥を含め、動物から植物まで多数の発表があり、鳥の研究者にとってもよい刺激となる学会です。一般講演・シンポジウムは2、3、4日です。発表・参加の申し込みは12月で締め切られますので、参加される方は当日参加(参加費5500円)してください。問い合わせ先:

〒464-01 名古屋市千種区不老町、名古屋大農学部造林学教室内

日本生態学会第39回大会準備委員会 (052-781-5111 内6307、FAX 052-781-4447)

◆8月17~22日 国際行動生態学会議 (Princeton、アメリカ)

◆9月1~3日 生物界における安定同位体に関する国際シンポジウム (三菱化成生命科研)

問い合わせ: 三菱化成生命科研 (〒194 町田市南大谷11号、0427-24-6283)

◆11月22~23日 日本鳥学会大会 (大阪市大: 詳細は次号)

※ 関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい。

野生鳥類の鉛中毒について

竹下 信雄

ここ数年来、日本国内でも鉛散弾摂取によるガンカモ科の中毒死が、北海道を始め各地で頻発していることが明らかになってきました。鉛の釣り重りをのみこんで死んだコハクチョウとタンチョウの例もあります。この病気は、地上や水中でのみこまれた鉛が、筋胃（砂嚢）ですりつぶされ、胃液によって溶解し血中に入り、貧血や筋萎縮などの症状を呈し、ひどい場合は2、3日で死に至ります。

昨年6月にブリュッセルで開かれた国際水鳥湿地調査機構（IWRB）主催の水鳥類の鉛中毒ワークショップでも、出席した21か国のすべてから鉛中毒が報告され、31種もの陸鳥でも鉛中毒が報告され、事態の深刻さが浮き彫りにされています。欧米では50年以上も前から、鉛散弾禁止の議論があり、近年アメリカを初め、ヨーロッパ各国でも禁止の措置が取られつつあります。鉛にかわり、鋼鉄製またはタングステン製の散弾が使用されています。イギリスでは鉛の釣り重りも厳重に規制されています。

日本では4年ほど前によく鉛中毒の発生が確認されましたが、これは、野生動物の死因の調査が詳細に行われていなかったため、それまで鉛中毒が一切なかったとは信じられません。鉛中毒の多くが、亜急性なので、顕在化した急性の死亡数よりも実際にははるかに多くの中毒死があることがまちがいに、死亡しないまでも、より多くの鳥で中毒は慢性化し、衰弱、繁殖力の低下、捕食動物による被食率の増大など、野生鳥類のこうむる被害は相当なものでしょう。

環境庁は、昨秋から小規模な実態調査を始め、その結果次第では鉛散弾の規制を検討したいとしています。本会は昨年の大会（9月、東京・立教大学）で、鉛散弾と釣り重りの禁止を求めた決議を採択しましたが、この問題は、行政、法律はもとより、広い分野にわたっており、その解決には民間からの強い働きかけが必要と思われます。

◇死因の分析： 北海道大学では、鉛中毒個体と思われる死体の分析を行っており、死体の送付を呼びかけています。鉛中毒でも筋胃などにすでに鉛がない場合が多いこと、筋胃中に実際にあっても目視では約70%しか見つからないことに注意。

1. 生体のままの送付

ビニール袋に入れ、氷またはドライアイスを用いて0～4℃で保存し、できるだけ早く「クール宅急便」で送る。

2. 内臓（消化管／腎臓・肝臓）の送付

解体して、腺胃と筋胃（消化管全部でもよい）、またできれば腎臓と肝臓（ともに一部でもよい）を送る（方法は1と同じ）。

3. ホルマリン浸漬した内臓の送付

10%ホルマリンに浸漬し、送る。この場合は冷やす必要も急いで送る必要もない。

☆送付の際にメモをつける（鳥種、採取場所、採取年月日、その他状況など）。

☆あて先および問い合わせ先

〒060 札幌市北区北18条西9丁目

北海道大学獣医学部 比較病理学教室

板倉 智 敏

電話 011-716-2111（内線5191-4）

直通（FAX 兼用）011-717-3707

◇鉛中毒の症状： 次のようなものが生きている鳥にみられる。

1. 総排泄口付近に胆汁の緑色染みができる。
2. 食べ物をあまり採らなくなる。
3. 群れから離れて単独になろうとし、隠れ場所を探す。
4. 全身が麻痺して、翼が垂れ下がる。初列は下がり、次列・三列は銀杏羽のように高く掲げる姿勢をとることが多い。
5. 活動が低下し、飛ぶことを嫌う。
6. 足どりが不安定になり、ひいては歩くことも、立っていることもできなくなる。

◇体内のおもな所見：

1. からだがやせていて、脂肪を欠く。
2. 筋肉（とくに胸筋）、肝臓、腎臓が萎縮し

ている。

3. 心臓とそれを包む膜との間に過剰な液体がある。
4. 胆嚢が肥大している。
5. 筋胃が小さくなり、内側の厚肉は硬くなり、胆汁に染まる。

◇連絡先：鉛中毒に関する日本鳥学会の連絡は当面、私が担当します。内外の文献も多少集めましたので、関心のある方は連絡して下さい。また、鉛中毒例を集めていますので、ご存知の方はご教示下さい。

〒167 東京都杉並区西荻北 3-9-3

電話 03-3390-4963

「第2回オオタカシンポジウム」を終えて

オオタカ保護ネットワーク

遠藤孝一

1991年12月1日(日)、東は福島からは西は兵庫まで約90名の方々が立教大学に集まり、「第2回オオタカ保護シンポジウム」が開催された。

午前中は、環境庁野生生物課課長補佐・森康次郎氏ならびに立教大学助教授・上田恵介氏の挨拶の後、「ハイタカ属の生息状況と生態」と「各地におけるオオタカ保護活動」に関する8題の発表があった。

これらから、市街地周辺におけるツミの生息の概要や今まで知られていなかった茨城県や奥多摩地区のオオタカの生息状況が明らかになった。また、近畿・中部・関東の各地で開発とオオタカ保護が大きな問題になっていることが報告された。

さらに、(1)オオタカが本州以北の平地から低山の二次林など、人間活動と関わりの深い森林で繁殖していること、(2)農林業の不振や内需拡大政策により、それらの地域で様々な開発が行なわれていること、(3)鳥獣保護法や環境アセスメント法など、保護に関する法律が未整備であること、などによ

って左記の問題がより広域化・複雑化・長期化していることが指摘された。

午後は、日本野鳥の会研究センター所長・樋口広芳氏(演題「自然界におけるワシタカ類の位置」)ならびに同保護部長・中村滝男氏(同「密猟問題への今後の取り組み」)による特別講演の後、生息地保護と調査研究のふたつに分かれて討論に入った。

それぞれの分科会では、情報や意見交換・今後の保護や研究活動の進め方・ネットワークの在り方などが話し合われた。そして、最後に全体のまとめとして、今後も情報交換を密にし、さらに合同調査なども行なっていくことが確認され、休み時間も十分にとれなかったハードなシンポの一日が幕を閉じた。

なおこの後、疲れもものともせず盛大に懇親会が行なわれたことを付け加えておく。

最後になりましたが、ご後援いただいた日本鳥学会・日本野鳥の会、ご協力いただいた環境庁および上田恵介・樋口広芳・中村滝男の各氏をはじめとする皆さんに深く感謝いたします。

本屋紹介 一追記一

40号でオーストラリアの本屋〔Andrew Isles〕を紹介したが、会員のNさんから「あそこは高いよ」との指摘を受けた。そう言われて調べてみると、オーストラリアの本はそうでもないが、欧米の出版物はたしかに高い。やはりイギリスの本ならイギリス、アメリカならアメリカの本屋に注文するのがよいようだ。

それと、これもNさんからカタログを頂いたのだが、Natural History Book Service Ltd.というイギリスの本屋は、年2回のカタログを分厚いタブロイド判(64p.)で送ってくる。本の写真や、内容説明を詳しく載せているので、内容がわからずにタイトルだけで買って失敗する、という危険が少なくてもよいかもしれない。Access. Mastercard、VISAを受け付けているので、使いやすそうである。住所は 2 Wills Road, Tornes, Devon TQ9 5XN, UK (上田恵介)

極域生物シンポジウムと鳥類研究

長 雄 一

12月4・5日に東京の国立極地研究所で極域生物シンポジウムが開かれた。このシンポジウムの特色の1つとして、幅の広い分野の研究者が参加する点あげられる。つまり、研究対象生物はバクテリアからクジラまでのほり、シンポジウムの発表が粹にとらわれていないことがわかる。

鳥類の発表は、ペンギンを対象とした採餌行動や繁殖生態の研究が中心であったが、亜南極でのアオメウの採餌潜水の研究や、窒素同位体比から推定したミズナギドリ類の食地位の研究等、ペンギン以外での力作もあり、鳥類全部で8編の発表が行われた。シンポジウムの総発表数が71編であることから、分野別での発表数で鳥類は平均的であったと述べて良いだろう。

さて、ペンギンを含む海鳥類が近年南極海洋生態系での重要な高次捕食者として注目されている、ということがよくいわれるようになった。また、南極に限らず海洋生態系の仕組みを知ることは、魚類資源あるいはオキアミ資源を国際世論に認められるかたちで適正に利用してゆく上で欠くことのできないステ

ップの1つである。その意味で、国際的に海鳥類の研究者に対して、海洋生態系全般に関する知識が要求される時代が来つつあるのである。このことと関連させて、極域での鳥類調査のことについてふれたい。例えば、南極での日本の生物調査活動の中心は自衛艦「しらせ」と昭和基地であり、鳥類を含む生物全般の調査研究が、地学・オーロラ・雪氷・気象等のプロジェクトの1つとして運営されている。他の極域での鳥類調査についても状況は同様であり、鳥類だけの研究計画として実行される例は少なく、他の分野の調査と絡めて行う場合が多い。これは研究上の制約となるかもしれないが、同時に鳥類というものをより広い視野からみる上で貴重な経験を得る機会でもある。ここで、極域生物シンポジウムはそれらの研究活動の成果であり、国内で同様な広い視野を得る機会の1つであることをアピールしたい。また、海鳥類の研究者以外の人々にとっても極域生物シンポジウムが、海鳥類あるいは海洋生態系という広く魅力ある分野への窓口になれば、と思う。



Conference of European hole-breeding birdsに参加して

早稲田大学所沢キャンパス自然環境調査室 大堀 聡

去る10月21日から10月26日まで、スイスのゼンパッハ鳥類研究センターで開かれたヨーロッパ樹洞営巣性鳥類会議に出席した。この会議はその名称のように樹洞営巣性鳥類研究者の集まりである。3年前にコルシカで第1回大会が開催され、今回が第2回目である。次回は2年か3年後にスウェーデンかハンガリーで開催予定である。

参加者は100名位であった。スイスはもちろん、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、オランダ、ベルギー、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、フランス、スペイン、そしてイギリスと、ヨーロッパ中の樹洞性鳥類の研究者と学生が集まった。ヨーロッパ以外の参加者は日本とカナダから1名ずつであった。

ゼンパッハは、チューリッヒから鉄道で約1時間のルツァーン（この町は屋根のついた木製の橋があり、観光ツアーのコースに入っている）からさらに約20kmのところの位置する、湖のほとりの小さな町である。敷き詰められた石畳と石造りの家並や教会の尖塔が、歴史の古さと由緒ある町であるらしいことを感じさせる。

鳥類研究センターは町の中心から湖畔を10分ほど歩いたところにある。小じんまりとした木造の建物は、今回の講演会場、ポスター展示場となった剝製標本展示室兼講義室と、参考図書室、そして半地下に研究室を備えている。庭にはコウノトリやカモのいる小さな池と禽舎があった。敷地は400坪ほどだろうか。

今回は Environmental Effects on Reproductive Success in Hole-breeding Birds（樹洞営巣性鳥類の繁殖成功に係わる環境要因について）というテーマで講演とポスター発表が行われた。研究対象となっている主な鳥類は、シジュウカラ、アオガラ、ヒガラ、イエスズメ、マダラヒタキ、シロエリヒタキ、ホシムクドリなどである。変わったところでは、南フランスのヨーロッパハチクイを扱った仕事もあった。テーマは8つのセッションに分けられ、30分の講演が各3～4本行われた。各セッションは次の通りである。

Session 1. Population dynamics, reproduction and the environment（個体群動態、繁殖、環境）、Session 2. Effects of pollution or acid rain on reproduction（環境汚染、酸性雨の繁殖への影響）、Session 3. The effects of food availability on reproduction（餌量の繁殖への影響）、Session 4. Mating system and male mating success（配偶システムとオスの配偶成功）、Session 5. The effects of parasites and predators on reproduction（寄生虫と捕食の繁殖への影響）、Session 6. Various aspects of reproduction（繁殖に関するその他の諸問題）、Session 7. Reproductive parameters as environmental indicators（環境指標としての繁殖パラメーター）、Session 8. Conclusions（結論）

僕はセッション6で、シジュウカラの繁殖密度とLate Broodの関係について話をした。アオダイショウが主な捕食者であることを始めとして、暖温帯の気候と常緑広葉樹林になじみのうすいヨーロッパの人達にはエキゾチックな内容だったらしい。おかげさまで、講演は大変好評だった（誰も聞いていないのだから強気）。こちらは、ヨーロッパのシジュウカラが日本のシジュウカラとは違うことを長年論文を読んで知っていたのだけれど。

やはり、関心の中心はエサの問題である。エサ量の直接の測定と、酸性雨による林のダメージ（これは、私達が考えている以上に深刻な問題であるらしい）とエサの問題を関連させた仕事が多かった。2～3年前から植物、鳥、昆虫関係者が大きなチームを組み、大きな予算で仕事をしている。その結果がそろそろ出始めたようで、今後が楽しみである。Hさんも、頑張ってください。

講演は午前と午後30分のコーヒープレイクと1時間30分のランチとディナーをはさみ、朝8:30から夜10:00までびっしりと行われた。夕食後のデザートには、8:30からラジオテレメトリー、DNAフィンガープリントなどの技術講習もあった。5:00からのポスターセッションもワインつきだったので、1日中食べ、飲んでいた。昼食や夕食を歓談しながらこなすのも大きな仕事であった。当然毎夜のアフターセミナーも充実した。

シジュウカラをやっている者にとって、ペリンズ、バーレン、ティンバーゲン、ドント、ノルドウィック、マクリーリ、ゴスリーらと話げたのは夢のような時間であった。

成末編集委員の

若手インタビュー(3)

—堀田昌伸さん—

今回の鳥学会大会は、大阪市立大学で開催される。その実行委員長を務められる堀田昌伸氏のプロフィールを紹介したい。

堀田氏は、がっちりとした体格の若手研究者で、現在同大学、動物社会学研究室の山岸哲先生の下で、ヒメアマツバメの番関係に関するドクター論文を作成中である。

1981年、静岡大学に入学し、植物の形態学研究室では、富士山(宝永火口周辺)で、噴火後の200年間に森林限界がどのように上昇しつつあるのかということ調べられた。つまり落葉から、どの位窒素が抜けていくのかを測定し、土壌や土壌動物によってどの位利用可能な窒素に変わっていくのかを、具体的に調べられたのである。

このように、学生時代に植物を勉強して、その後に動物を研究するというのは、動物や生物の世界をより深く理解するのに役立っているにちがいない。しかも堀田氏は、学生時代に日本野鳥の会静岡県支部で、ヒメアマツバメのバンディングもしていた。そしてそこで、彼らの離婚現場を数多く観察し、興味をそそられたらしい。



その後、大阪市大のマスターコースに進学し、静岡をフィールドとして膨大なヒメアマツバメのデータを蓄積した。それらによれば、ヒメアマツバメの繁殖期は4月から12月までの長期間に渡り、日周活動も、冬など、朝寝あり、休日ありのかなり気ままな生活をしているようである。そう言えば、本種は巣造りさえも、他種の古巣をちゃっかり利用してしまうなど、横着というか省エネの才に長けている節が見受けられる。今後、堀田氏によって、ヒメアマツバメのユニークな生態が更に明らかになっていくことと期待している。(成)



鳥類、哺乳類、ダニ類、線虫類の試験、研究にこの1冊。

応用動物学実験法

藤巻裕蔵・草野忠治・
森 実須・石橋信義/編
A5判 310頁
定価4,000円(本体3,884円)

鳥類をはじめ、哺乳類、植物ダニ類、植物寄生性線虫類
の各種試験、研究手法を平易に解説

●お求めは全国の書店または当会まで

全国農村教育協会 東京都台東区台東1-26-6(種調会館) 〒110 TEL. 03(3833)1821 FAX. 03(3833)1665

豪雪地帯の白山麓へ転勤

林 哲

平成3年5月、福井県自然保護センターから野生動物の宝庫と言われる白山麓の石川県白山自然保護センターに異動しました。

当センターは、金沢市から南へ約50kmに位置する中宮温泉（石川県吉野谷村中宮）のそばで、昭和48年にオープンしました。以来、18年経過し、昭和56年には一里野高原スキー場の近くに「ブナオ山観察舎」を、更に58年には、本庁舎（吉野谷村木滑）を建設し、ここで通常業務を行っています（これにともなう、中宮庁舎は、中宮展示館と改称されました）。

当センターは、設立以来、白山全体を自然教育の場ととらえ、白山地域の自然誌に関する基礎的、応用的な調査研究を行うと同時に白山国立公園や県立自然公園の総合的な管理ができるよう努めています。一方、研究成果の普及を図るため、普及雑誌「はくさん」（年4回）、「白山の自然誌」（年1回）の編集・発行の他、「研究報告書」（年1回）も発行して

おります。

さて、当施設に赴任して私に課された用務（強制ではありませんが）は、白山地域の鳥類の様々な特性を明らかにすることだと考えています。

白山は、中部山岳地帯から離れた孤峰であること、高山帯をもつ山であること、ブナ林が広く分布すること、有数の豪雪地帯であること等々、これらの自然環境は、鳥類の生活史や分布に少なからぬ影響を与えているにちがひありません。これらの1つ1つを解きほぐし、鳥類からみた白山（地域）の属性を示すことができるように努めたいと思っています。

1985年以来、福井市の一乗谷川流域で研究してきたキセキレイの社会構造についても、当地（手取川流域）で、更に追究した上で白山（地域）の特性を抽出したいと思います。今年の繁殖期は、フィールド探しになると思いますが、ご期待ください。

当センターのブナオ山観察舎から、カモシカ、ニホンザル、イヌワシなどをたびたび見ることができます。特に2～3月の積雪期が好適です。一度、雪の白山麓へ、皆さんもおいでください。連絡先は下記の通りです。

石川県白山自然保護センター

本 庁 舎

所在地 石川県石川郡吉野谷村字木滑
TEL 07619 (5) 5321

中宮展示館

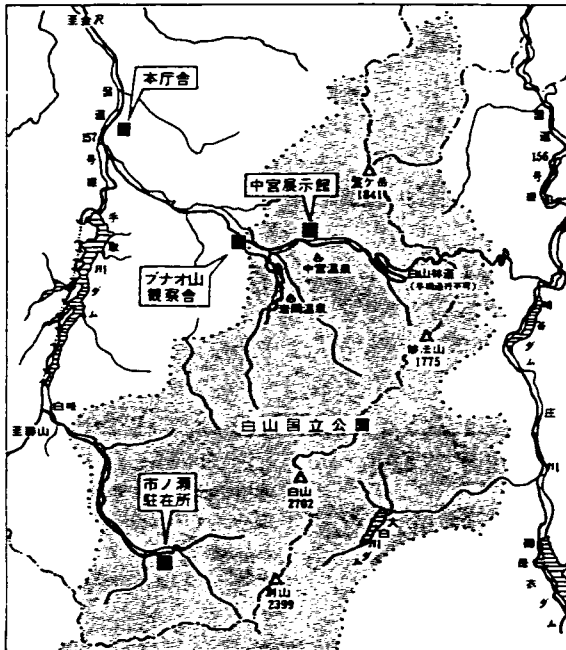
開館日 5月～11月上旬
（積雪等の状況によりかわります）
開館時間 午前9時～午後4時30分
所在地 石川県石川郡吉野谷村字中宮
TEL 07619 (6) 7111

ブナオ山観察舎

開館日 11月20日～5月20日
開館時間 午前10時～午後4時
所在地 石川県石川郡尾口村字尾添
TEL 07619 (6) 7250

市ノ瀬駐在所

駐在期間 5月1日～10月31日
所在地 石川県石川郡白峰村字白峰(市ノ瀬)
TEL 07619 (8) 2504



国際学術誌「Colonial Waterbirds」 をご存知ですか

藤岡正博

雑誌「Colonial Waterbirds」は、The Colonial Waterbird Society (訳が難しい…) が発行している英文の鳥学雑誌です。生データの豊富な記載論文からレビューまで、カモメやウ、サギなど、集団営巣する水辺の鳥についての論文を幅広く掲載しています。また、鳥やその環境の絵(白黒のみ)を論文とは別に載せてくれる点がユニークです。この雑誌の目次・要旨は、Biological Abstracts, Current Contents, the Zoological Record, Wildlife Reviews に取り上げられています。

出版母体である Colonial Waterbird Society は、集団繁殖する水辺の鳥の生理・生態や保護などに興味を持つ人からなる国際的な

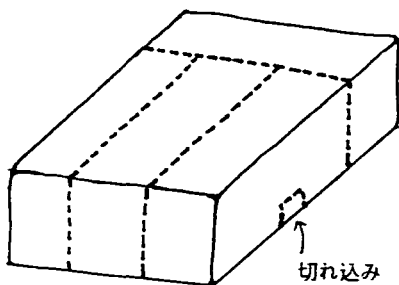
鳥学団体です。会費は \$ 20 (学生 \$ 15) で、Colonial Waterbirds (年 2 回) と Newsletter (年 3 回) をもらえます。実際には北米の研究者が中心の学会で、大会もほとんど北米で行われており、同じく北米基盤の Seabird Society と合同で大会を持ったこともあります。しかし、この学会は北米以外の地域からの論文投稿などに積極的に取り組んでいて、その一環として、世界の地域ごとに編集委員を決めています。私も旧ソ連から東アジア地域の委員を 91 年の秋に山岸氏から引き継ぎました。

そんなわけで、論文・絵の投稿を歓迎します。英訳についても相談に応じます。この学会・雑誌についてさらに知りたい方はご遠慮なく私の方までお問い合わせください。

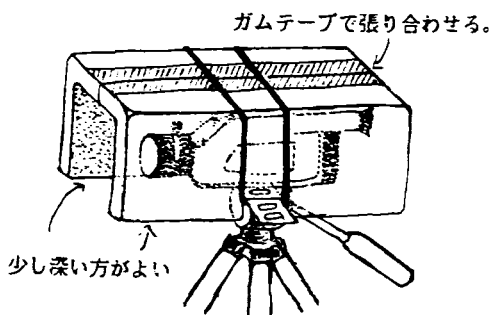
〒305 つくば市観音台 3-1-1 農業研究センター
鳥害研究室 (Tel 0298-38-8925)

私のフィールドアイデア(2)

ビデオカメラの Sun shade box & Rain box



カメラの大きさに合わせて、
点線部をカッターで切る。



抱卵や育雛状況の調査にビデオカメラを利用されている方も多いと思います。野外調査で使用するとき気になるのは直射日光と雨です。密閉容器は雨には強いのですが、中がムレると夏の日向では高温になって使用不能になります。ビデオはそれ自身が発熱するので密閉容器は避けた方がよいようです。私は発泡スチロールの箱(魚屋さん等で使っているトロ箱)を図のように細工した箱を使っています。安くて、断熱効果抜群、雨にも強く(アシ原で夕立にあった時も大丈夫でした)、しかもムレないという優れたものです。箱は緑色か迷彩色に塗っておくと良いでしょう。三脚への固定は、車にアクセサリ等を取り付ける金具(200円ぐらい)をカメラと三脚の間に挟んでネジを締め、これにゴム紐で固定します。これでは心許ないという人は、DXプレートという三脚に2台のカメラを取り付ける器具を使うと万全です。

(松田喬 大宮中央高校)

ニュースファイル・フィールドアイデアの原稿募集中!

新刊紹介

Nestling mortality of granivorous birds due to microorganisms and toxic substances. Editors: J. Pinowski, B. P. Kavanagh and W. Gorski, Polish Scientific Publishers, Warsaw, 1991, 204pp. 定価 約 \$ 50.00.

ポーランドの Prof. J. Pinowski が主宰する Working Group on Granivorous Birds によって行われたシンポジウムの記録で、スズメ、ハトなどのひなの死亡率・死亡要因を中心に、繁殖、生態などに関する21篇の論文よりなる。2、3の論文を上げると、
R. F. Johnston: Variation in egg and nestling mortality in feral pigeons
W. Gorski: Breeding losses in Collared Dove and Woodpigeon populations from the urban area of Slupsk, Poland.

B. P. Kavanagh: Factors affecting the breeding performance of the Magpie in three European cities.

P. I. Cordero: Predation in House Sparrow and Tree Sparrow nests.

購入希望者は、Prof. J. Pinowski, Department of Vertebrate Ecology, Institute of Ecology, Polish Academy of Sciences, Lomianki, Poland へ申し込むか、中村にご連絡ください。(中村和雄: 305 つくば市観音台3-1-1、

農業研究センター鳥害研究室 Tel. 0298-38-8825)

●お詫びとお知らせ

前回お送りした学会誌の宛名ラベルに印刷された会費の入金状況は、昨年11月20日頃までのものです。不手際や不測の事態でこのような結果となったことを深くお詫びいたします。本ニュースの宛名ラベルの表示を再確認して下さい。何も表示のない方は1992年度会費納入済みということですので。(会計幹事)

●『日本鳥学会誌』への投稿は、

〒305 稲敷郡茎崎町松が里1 森林総研 鳥獣生態研究室、松岡茂 宛

●『鳥学ニュース』への投稿について

原稿はワープロまたは原稿用紙で、1行20字または42字(囲み記事は19字または40字)にそろえて下さい。写真、カットも歓迎しますが、長い原稿は載せられません。送り先は、

〒171 東京都豊島区西池袋3丁目 立教大学・一般教育・生物、上田恵介 宛

次号 (No.43) の原稿〆切は3月31日、発行は5月1日

編集後記

- トリがトリもつ縁で、世界各国の方々と知り合う機会がふえ、将来訪れるのが楽しみ(成)。
- ニュースファイルに投稿して下さい。フィールドでの情報、研究テーマ、異動…何でも(花)。
- 巻頭言、皆さん快くお引き受け下さり、深謝(老K)。
- 3月は小笠原ヘメジロとメグロを調べに行きます。ザトウクジラにも会う予定(K)。

鳥学ニュース No.42

1992年2月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒169 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内 (03-3364-2311)

発行人 森岡弘之 ニュース編集幹事 上田恵介・中村一恵
印刷所 添田印刷株式会社 ニュース編集委員 大堀 聡・花輪伸一・成末雅恵